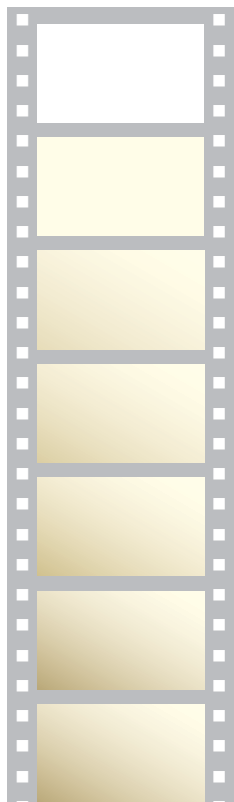
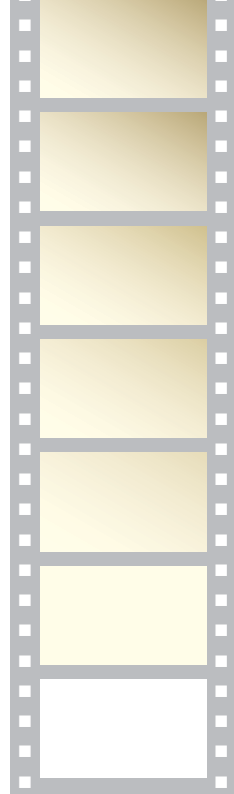


伸^ノさんのシネマトーク

鈴木 伸夫



第六十七回 「アナウンサーへの道」⑦

面接試験の「フリートーク」は大勢の試験官に囲まれ、四方八方から関連性のない質問を次々と浴びせられていい気持ちはしませんでした。これもアナウンサーになる第一歩だと思い、我慢して答えました。すると、ぼくの右横にいた試験官が

〈A試験官〉「ところで、君の支持する政党はどこかね？」

この質問は、予想されていただけに、ぼくはすぐ答えました。

〈伸〉「特にありません。」

〈A試験官〉「二十も過ぎて、支持する政党もないのかい？」

この言葉で、ぼくは「扇動されている」と気が付き、

〈伸〉「特にありません。」

と再び、答えたのです。そうすると、今度は左横にいた試験官が、

〈B試験官〉「保守なの革新なの？」

困ったぼくは、

〈伸〉「強いてあげれば○○党です。」

と言いました。当時、70年安保を前に政治は揺れ動いていましたが、ぼくは政治には全く関心がなく、自分の好きなことをやっていました。友達の間では面接で「支持する政党」を聞かれれば「○○党」と言えば通ると話していたので、マニュアル通りに対応したのですが、質問はそれで終わらなかつたのです。

今度は右横の試験官が、

〈A試験官〉「現在の○○○党の党首名をフルネームで言って下さい。」

〈伸〉「エー！」

と心のなかで思ったのです。ぼくの悪い癖のひとつに「人の名前をすぐ覚えられない」という癖があることを知っているかのような質問でした。おまけに○○○党の党首の名前をフルネームで答えるように要請しています。

確か、前委員長も、今の委員長も東西南北の同じ方角の名字でした。やっと前委

員長の名は思い出しましたが、いくら考えても現委員長の名前は思い出せません。

「これは正直に話したほうがいい」と思い、「忘れました」と言ったのです。

そのあと、2と3の質問があり、地獄の面接試験は終わりました。ぼくは、この面接には「脈がない」と自分自身ではつきりわかりましたが、「不合格者にも連絡する」の言葉を信じて一週間待ちました。しかし、何の連絡もないので、十円玉をたくさん持ち、実家（仙台）近くの赤電話からSテレビの人事部へ電話をしたのです。

〈伸〉「先日、面接試験を受けた鈴木と申しますが、結果は出ていますか？」

〈人事部〉「当然のことのように」ハイ、すでに発表しています。」

〈伸〉「私の名前はないようですが、面接会場では不合格者にも必ず知らせると聞きましたか！」

〈人事部〉「サア、そんなことを言ったんですか、残念ながら不合格です。他のHテレビには入っていませんか？」

連絡もしないで、人のことだと思って、…電話を切つてからぼくは改めて腹が立

ち、愕然とするのでした。

「アナウンサーへの道は遠い・・・」

伸（了）

平成25年7月